慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	インターネット時代の美術コレクション形成 : 田井みず氏による絨毯蒐集を事例として
Sub Title	Art collecting in the age of the internet : the carpet collection of Ms. Mizu Tai
Author	鎌田, 由美子(Kamada, Yumiko) 田井, みず(Tai, Mizu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020.) ,p.25- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インターネット時代の美術コレクション形成

――田井みず氏による絨毯蒐集を事例として――

鎌田由美子・田井みず

はじめに

美術コレクションの形成は，それ自体が美術史や文化史の恰好の研究対象となっている[1]。1987年に出版されたクシシトフ・ポミアンのコレクション研究はもはや古典といえよう[2]。そこではさまざまなコレクションのタイプと成立過程，18世紀の美術商やコレクターの活動，さらには博物館の誕生が論じられた。

長い間，価値のある何かをコレクションできたのは，王侯貴族や有力な聖職者，豪商，おくれてそこに加わったブルジョワジーなどであったが，18世紀-19世紀になると，古代ギリシア・ローマの建築遺物などを集めた建築家ジョン・ソーン（1753-1837）などのように，学識者たちもコレクションを形成したほか，中産階級のコレクターも登場した。その後，19世

---

(1) コレクションについてはさまざまな研究がある。例えば，ジョン・エルスナー，ロジャー・カーディナル著，高山宏監修『蒐集』（研究社，1998）や松宮秀治『ミュージアムの思想』（白水社，2003），遠山公一，金山弘昌編『美術コレクションを読む』（慶應義塾大学出版会，2012）など。雑誌で特集されたものの一例として「特集 アート・コレクション」『西洋美術研究』8（2002）がある。

(2) クシシトフ・ポミアン著，吉田城，吉田典子訳『コレクション―趣味と好奇心の歴史人類学』平凡社，1992.

紀後半以降には，アンドリュー・カーネギーやロックフェラー家などのような大富豪による美術品蒐集が際立つ[3]。日本でも根津嘉一郎（1860-1940）や岩崎弥之助（1851-1908）・岩崎小弥太（1879-1945）父子，益田孝（1848-1938）ら実業家たちが美術品を蒐集し，のちにそれぞれ根津美術館，静嘉堂文庫美術館，五島美術館のコレクションの基礎となった。彼らの蒐集を助けたのは付き合いのある美術商であった[4]。

ところが20世紀後半以降には，オークション会社や業者を通じて，実業家や富裕な好事家のみならず[5]，一般の人がコレクターになれるようになった[6]。また2000年ごろからはインターネット・オークションを通じて，誰もが簡単に美術品を買うことができるようになってきた[7]。美術コレクションの歴史において，新たなステージに入ったともいえる。

しかし，現代における美術コレクション形成の在り方，とりわけインターネットの出現により一般市民による個人コレクションが容易に形成されるようになった様相については，ほとんど論じられることがない。そこで本稿では，インターネットを駆使して，世界的に見てもハイレベルな絨毯コレクションを作り上げた田井みず氏の事例をひとつのケーススタディとして紹介する。田井氏は，もともと美術と深いかかわりをもっていたわけ

---

(3) 欧米のコレクターの変遷について概観したものに，高階秀爾『芸術のパトロンたち』（岩波新書，1997）がある。

(4) 田中日佐夫『美術品移動史―近代日本のコレクターたち』日本経済新聞社，1981，第1章参照。

(5) 20世紀の日本の著名なコレクターについては同『現代の美術コレクター―美術館をつくった人々』日本経済新聞社，1995.

(6) たとえば現代アートのコレクターとして著名な高橋龍太郎氏は医師であり，宮津大輔氏は会社員であった（現在は大学教員）。それぞれ，『現代美術コレクター』（講談社現代新書，2016），『現代アートを買おう！』（集英社新書，2010）などの著作がある。

(7) 辺見海，岡部万穂「電脳蚤の市で版画を購入する―インターネットとコレクション」『版画芸術』121（2003），pp. 70-73は，ギャラリーだけでなく，インターネット・オークションも活用して版画作品を集めるコレクターを取材した短い記事である。

ではないが，インターネットを通じて絨毯についての知識を深めてコレクションを形成した，新しいタイプのコレクターである。本稿の最後には，インターネット時代における美術コレクション形成の可能性とその現代的な意義についても言及する。以下は，絨毯を蒐集した経緯を田井氏自らが記したものである。

1．手織絨毯との出会い――平凡な一市民に絨毯蒐集ができる時代

ふとしたきっかけで小さな手織り絨毯を手にして以来，絨毯に魅せられ，いまや収納に困るほどの数を集めてしまった。絨毯といっても，日本で「ペルシャ絨毯」と呼ばれるタイプの都市工房で織られた絨毯ではなく，主に遊牧民をルーツとする「トライバルラグ」や，家内工業で織られた「村の絨毯」が中心である。また，新品から古いものへと興味が移り，とりわけ19世紀末以前に織られた絨毯に魅力を感じて集めてきた。

近年では，展覧会を開くこともあり，「絨毯コレクター」と呼ばれることもあるが，その度に気恥ずかしさを覚える。なぜなら多少の浪費癖はあるものの，あまり高額な絨毯は購入できない一般市民であり，絨毯産地に赴くわけでもなく，もっぱらパソコンの前に座ってクリックして集めてきただけなのだから。

しかし，かく平凡な一市民であっても，自分なりに楽しめる絨毯がそこそこ集まったと感じている。それはパソコンの普及とインターネット環境の整備，電子決済や国際配送サービスの発達なしには不可能だった。グローバル化の進展に伴いヒトやモノの移動が飛躍的に拡大した結果，海外旅行が身近になり，輸入品が市場に溢れる時代になった。

かつて手織絨毯は一部の貿易商や海外活動を行う人士でなければ入手が難しい物だった。都市工房の絨毯もそうであるが，遊牧民の絨毯はさらに珍しかった[8]。ところが今や，手織絨毯は日本のあちこちで販売されてい

(8)　日本の著名な絨毯コレクターとして松島きよえ氏がいる。松島氏は，主に1960年代に遊牧民のテントを自ら訪ねて彼らと交流し，民族衣装やトライバル

るし，トルコなどに出かけて自ら購入することもできる。またパソコンが一台あれば，海外の市場にアクセスし，家に居ながらにして絨毯が手に入るようになった。平凡な一市民の極めて限定された経験ではあるが，絨毯蒐集の一例として供したい。

はじめて手織絨毯を購入したのは2005年の晩秋だった。近所にあるスーパーの催事場を通りかかると，当時日本で流行し始めていた「ギャッベ」と呼ばれる素朴な絨毯が積まれていた。赤・黄・紺などを基調にしたシンプルなデザインで，織りは粗いが毛足が長く，暖かい冬を迎えるのに良さそうだと思い，小さな一枚を買い求めた。その際，「これはイランの遊牧民が織ったんですよ。女性たちは物心がつくと絨毯を織る練習を始め，お嫁入りには自分が織りあげた絨毯を持っていくんです」という販売員の言葉が強く印象に残った。

実際に，ジョン・トンプソン『オリエンタル・カーペット』にはトルクメン族の幼女がミニチュアの織り機で遊ぶ写真が載っている(9)。太古の昔から，遊牧民は敷物だけでなく，家具の役割を果たす大小の袋物など，生活に必要な様々な毛織物を織ってきた。時は移って遊牧民の定住化が進み，イラン遊牧民のなかでも絨毯織りに定評のあるカシュガイ族でさえ，近年は機械織りのカーペットを使うことが多くなっているという(10)。だがはじめてギャッベを手にしたときの「遊牧民が織る絨毯」という販売員の言葉は，いつまでも耳に残っていた。

購入したギャッベは，それまで使っていた機械織りの絨毯とは全く違う印象を受けた。機械織りのものは無機的で，実用に耐えさえすれば良かっ

ラグを蒐集されたが，これはご主人が WHO の医務官であり，国連のパスポートを持っていたが故に可能だったと思われる。松島氏のコレクションについては『中近東遊牧民の染織―松島コレクション』（渋谷区立松濤美術館，1985）を参照。

(9) Jon Thompson, *Oriental Carpets*, John Calmann and King. London, 1988, p. 50.

(10) James Opie, *Tribal Rugs of Southern Persia*, James Opie Oriental Rugs, Oregon, 1981, p. 4.

たが，人の手で作り出されたものには温かみが感じられた。民藝に通じるものを感じ，見ているだけで気持ちが安らいだ。

他のギャッベも見たくなって，インターネットで情報収集を始めた。まず「ヤフー（Yahoo）」などのブラウザから「ギャッベ」の検索をすると，たちまちギャッベを扱うネットショップがヒットした。ギャッベの他にも「ペルシャ絨毯」や「キリム」と呼ばれる平織りなど，様々なタイプが販売されていた。商品説明だけでなく，お客様の声，インテリア写真，アフターケア，絨毯やキリムに関する一般知識，買い付けの現地レポートなど，見ていて飽きない。毎日のようにサイトを覗くうちに，どんどん購買欲が高まり，大きさや色使いの異なるものを購入していった。

ギャッベはたいてい単純な模様だが，やや「アートっぽい」デザインのものもある。『ギャッベ・アート』[11]という本を皮切りに，絨毯やキリムに関する書籍を入手しはじめた。「アマゾン（Amazon）」や「日本の古本屋」などで検索すると，思ってもみなかった資料が見つかることもあり，探す楽しさを感じ始めるようになる。やがて二冊の書物から「オールドキリム」という存在を知った[12]。

2．新品から「オールド」へ

日本では，やきものなど「骨董」の分野を除いて，一般的に「中古品」は価値の劣ったものとして扱われている。ところがキリム愛好家の間では「古いから良い」という価値観があることを知って驚いた。絨毯においても，産地や欧米では古いものが珍重されている。なぜ古いものが珍重されるのかは後になって知るのだが，当時は単純な好奇心から「オールドキリムと呼ばれるモノ」を知りたかっただけだった。ウェブで検索すると「Yahoo オークション（以下「ヤフオク」）」で相当数のオールドキリムが

⑾　堀田隆子『ギャッベ・アート』京都書院，1997.

⑿　この２冊は，ナデール・モラディアン『キリムのある部屋』（アートダイジェスト，1993）と，『キリムのある素敵な暮らし』（主婦の友社，2002）である。

扱われており，オリジナルの大きさのキリムだけでなく，キリムを加工したクッションカバーやポーチなども販売されており，何枚か買い求めた。

やがてヤフオクを通して，マットサイズの「オールド絨毯」を手に入れた。アフガニスタン在住のトルクメン族が30～50年前に織った絨毯だという。多少歪んではいたが，パイルを密に打ち込んだ質実剛健な絨毯は，乾燥した大地に生きる人々の力強さを感じさせた。茜と黒を基調とし，家紋のような「ギュル」モチーフによる大胆で幾何学的なデザインは，野性味を残しながら，どこかモダンな印象を受けた。

この出品者はネットショップを運営しており，そのサイトには店主が綴る絨毯ブログがリンクされていた。ブログには，絨毯やキリムを織るトルクメン族，バローチ族，ハザラ族など，さまざまな部族（エスニックグループ）の説明や，店主自らトルコのボザラン村や，アゼルバイジャンのシャーセバン族のテントを訪れた記事など，絨毯というモノだけでなく，人々の暮らしや住まいなどについても綴られていた。このブログは絨毯の向こう側に広がる世界への入口を筆者に示してくれたと言える。

この店から購入したバローチ族のソフレ（食事用布）は，実際に遊牧生活で使用されたオールドで，たかだか１平米の毛織物なのに強烈な存在感があった。モノが持っている「熱量」が違うといえばよいのか。ギャッベに出会ったときは「機械織り」に対して「手織り」の温かみを感じたが，今回は「販売のため」ではなく「自らの生活必需品のため」に織られた違いを，はっきり感じ取ったように思う。

３．絨毯への関心が生む出会い

2008年ごろには，絨毯についての興味深いブログに出会った。それを通じて，日本で手織絨毯というと「ペルシャ絨毯」がまず思い浮かぶが，欧米ではむしろ「トライバルラグ」や「村の絨毯」の人気が高いことを知った。また，絨毯関連サイトや海外ディーラーのサイトにアクセスできるようになり，日本では得られない絨毯関連の情報が豊富にあることを知った。

さらに，トライバルラグ・ディーラーの榊龍昭氏のブログが持つ，「部族」に関する内容の広さと深さには圧倒された。実際に訪ねると，ウエアハウスにはぎっしりと積み上げられた絨毯の他に，イギリスの染織専門雑誌『ハリ』や絨毯関連の洋書がうずたかく積まれている。絨毯に関する不確かな情報が多い日本の現状が気になっていた頃だったので，その勉強熱心な態度が強く印象に残った。厳しい自然環境のなか，家畜を連れて宿営地を移動する人々の持ち物には，部族としての誇りや精神性も込められている。榊氏の根底には，遊牧民の生き方への敬意があるように思われた。

榊氏は，日本ではまだマイナーな存在であるトライバルラグのすばらしさを多くの人々に理解してもらうための普及活動をしており，そのひとつが，2008年７月～９月に横浜の住宅展示場で開催された第４回「美しい世界の手仕事プロジェクト」であった[13]。会場を訪ねると，彼のほかに，イスラーム美術に造詣が深いＪ氏，自ら絨毯を織っているＴ氏など，それぞれに専門分野を持った人たちが，「好き」なことのために労苦を厭わず生き生きと活動していた。

シルクロードをテーマとした会場では，絨毯が壁面展示されるだけでなく，床にも敷き詰められて踏み心地を確認することができた。また，和光大学講師の村山和之氏によるレクチャーを通じ，バローチ族の宗教，生活，考え方などについて知った。さらにトルクメン絨毯蒐集家のＭ氏によるレクチャーは，敷物や各種収納袋，テントベルトなどを示しながら，トルクメン族の歴史や各支族の織りの特徴などについて語るものだった。さまざまなトライバルラグのなかでもトルクメン族に特化して，マニアックなトライバルグッズを精力的に蒐集されるスタイルは大きな刺激となった。

⒀　第１回はバングラデシュのカンタ刺繍，第２回はコンゴ・クバ王国のラフィア布，第３回はインドシナの染織，第四回はシルクロードの織物・布・陶器の展示で，それと並行してワークショップ，レクチャー，ダンス，コンサートなどが開かれた。このイベントは，「日本ではあまり知られていない美しい手仕事を紹介し，ひいては人と人，地域と地域をつなぐ架け橋になることを願う」という非営利の活動だった。

イベントの準備や運営を担う人々も生き生きと活動していた。重い絨毯を壁面に固定する作業からはじまって，スライドスクリーン，マイク台，照明などを身近な材料で即座に作る人，その場の雰囲気を盛り上げる司会進行や，活動をすぐさまブログで報告する人，地味な準備や片付けを厭わずに協力する人々など，ボランティア精神旺盛な人々が活動を支えていた。筆者はこのようなクリエイティブで前向きな人々に大きな刺激を受けた。モノを集めることが他の人々や世界とつながっていく，魅力的な例との遭遇だった。

4．アンティークを求めて――海外ウェブサイト eBay と rugrabbit

海外のサイトを見はじめると，欧米には日本とは比較にならない数と質の絨毯が蓄積されていることが分かった。欧米では19世紀末以降にオリエント絨毯がブームとなり，インテリアに用いられてきたため，絨毯の取り扱いが格段に多く，「アンティークキリム」「トルクメン絨毯」「カシュガイ族」など日本語で検索していたものを“antique kilim”“Turkmen rug”“Qashqai tribe”と英語にするだけで，ヒットする件数が格段に増えた。さらに検索を「ウェブ」から「画像」に切り替えると，一瞬にして絨毯が視覚化され，絞り込みが更に容易になる。画像を見ていると，羊毛の艶や味のある色合い，生き生きとした意匠に惚れ惚れとして，アンティーク絨毯[14]への憧れは募る一方だった。

やがて2009年５月にイギリスのアンティーク店のサイトで，一枚のキリムに目が止まった。送料込みの価格が明示され，「購入」をクリックすれば，ペイパルを通じて手続きが完了するシステムだ。海外から直接の購入は初めてだったので，プライバシーポリシーをチェックし，受け取る際に

---

⑭ 「アンティーク」の基準は厳密には存在しないが，100年以上前の美術工芸品などを指すのが慣例である。関税についてのイギリス政府によるウェブサイトなどを参照。https://www.gov.uk/government/publications/notice-362-imported-antiques/notice-362-imported-antiques（最終閲覧日　2020年３月19日）

８％の関税を徴収されることも確認した。支払総額を計算すると，日本での相場に比べてリーズナブルに感じたので，購入に踏み切った。配送はフェデックスが行い，３日という速さで届いた。品物も期待以上の品質だったので，これに味をしめ，毎日のように海外サイトを覗いては絨毯を探すようになった。

eBay

まもなくアメリカ最大のネットオークションサイトである eBay を見つけた。まず驚いたのは，膨大な出品数である。商品の多さはありがたい反面，絞り込み機能を用いて検討に値するものだけを取り出す工夫が必要だった。やがて何度か eBay を利用するうちに，写真や商品説明の確かさ，納得できる価格，実物を受け取っての満足度などから，「ここで買えば間違いはない」という出品者が特定されてくる。特定の人物の出品物を見ることにより，検索はずいぶん楽になっていった。後述する rugrabbit の出品者も含め，同じ人から何枚も購入したケースが多かった。

eBay の画像には「拡大機能」が備わっていて，画像にカーソルを当てるとその部分が拡大され，かなり詳細な部分まで確認できた。そのため実際に商品を受け取ってみて，想定とかけ離れていたという経験はない。ただし「拡大機能」を使っても，余程でなければ「汚れ」は分かりにくいし，「虫食い」があっても説明文に記載されていなければ，商品が届くまで分からないケースもあった。eBay は買い手だけでなく売り手もワールドワイドなので，非英語圏からの出品者は表現が不十分だったり，汚れなどに対する価値観の違いから，戸惑うことがなかったとは言えない。

こうした問題点を抱えながらも，eBay は魅力的だったと言える。一つは，膨大な数の商品のなかに，古い時代の良品が一定数含まれていることである。19世紀末からの「カーペットブーム」時代に輸入されたものをベースとして，さらに1960年代から評価されたキリムやトライバルラグも加わっている。逆にイランやトルコなどの原産地では，すでに相当数のアンティ

ーク絨毯が海外に流出して，現地に出かけても古いものを見つけることが難しく，あったとしても非常に高額であるらしい。

eBay に出品されている絨毯の平均的クオリティはそれほど高いとは思われないが，検索に工夫を凝らして丹念に探せば，個人で楽しむにはまずまずのアンティーク絨毯を見つけることができる。かつて引越しや代替わりなどで不要になった絨毯の多くは，ガレージセールや中古品屋，蚤の市などで転売されていたが，eBay の登場によって，売り手と買い手の所在地を問わず，パソコンが一台あれば「巨大な蚤の市」にアクセスできるようになったのである。

もう一つは，価格面での魅力だ。何をもって「相場」というのか難しいところだが，「これが日本で売っていれば幾らぐらい」と筆者が考える価格の，３分の２から半額程度で手に入ることが多かった。eBay に絨毯を出品するのは「絨毯商」「コレクター」「絨毯に詳しくない人」に分かれるが，価格と品質のバランスから考えると，筆者の場合は「コレクター」から購入したモノの満足度が高く，「詳しくない人」からは稀に「掘り出し物」が見つかった。

また，当時の為替レートによる恩恵もある。2009-12年にかけてはかなりの円高で，とりわけ対米ドルで顕著であった。ペイパルのレートで１ドル当たりを換算すると，2009年は93円前後，2010年は94円から83円前後，2011年は78円までになった。2012年から反転して83円前後に戻り，徐々に円安傾向になっていく。為替レートから考えても，良い時期に絨毯を集めたと言えるのかもしれない。

簡便で安心できる決済と，迅速な配送という点も挙げなければならない。決済はペイパルが中心で，相手にクレジットカード情報を知らせずに支払うことができた。配送について，世界各国の出品者から，遅くても２週間以内には届けられた。

rugrabbit

eBay と並行して rugrabbit というテキスタイル売買サイトも見るようになった。主に欧米のディーラーやコレクターが「コレクションの対象となる染織品」を売買するサイトで，eBay よりも専門性が高い。同じ人物が rugrabbit にはマニア向けの物，eBay には少し落ちる物を出品しているケースも見受けられた。eBay とは違って 1 日あたりの出品数は多くても数十件なので，絞り込みの作業は不要である。

一定の制約はあるが，誰でも自由に絨毯やテキスタイルを出品することができ，買い手は売り手にメールなどで直接連絡を取って商談をする。売る側も買う側も絨毯に詳しいので，格安で買えることもなければ，法外な価格をふっかけられることもない。出品は「トライバルラグ」と「村の絨毯」が中心で，稀にサファヴィー朝やオスマン朝など「宮廷絨毯」のフラグメント（端切れ）が出てくる。フラグメントでも宮廷絨毯の場合はとたんに値段が跳ね上がるようだ。18世紀以前のものは滅多に市場に出てこないし，価格も桁違いである。1960年代以降に欧米でトライバルラグがブームになった理由の一つは，それなりの数が流通しており，少し頑張れば手がとどく価格で，味わいのある良品が手に入るからではないだろうか。

ペイパルは手数料が高いため，rugrabbit の出品者の中には金融機関経由またはウェスタン・ユニオンでの送金を希望する人もいた。商品が届かない場合などに仲介してくれる組織がないのは不安だったが，紛失などの事故は一度もなかった。

5．コレクションの形成

海外から購入した時期は2009年から2013年に集中している。購入をやめたのは，好みの物がひと通り集まったことと，団地住まいの我が家が飽和状態になったからである。約200点のうち，大きな絨毯とキリムはせいぜい20枚で，一畳程度のラグが半数以上を占め，残りは袋物と端切れである。パイルの剥げた絨毯も多い。一部はヤフオクで販売したり，友人に譲った

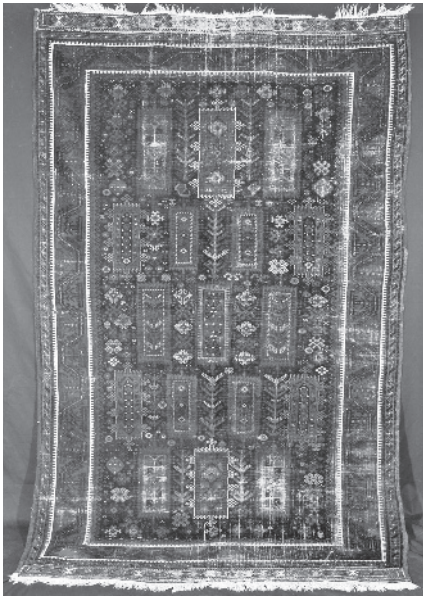

図１　絨毯，アフガニスタン（ティムーリ族），19世紀末頃，田井みず所蔵

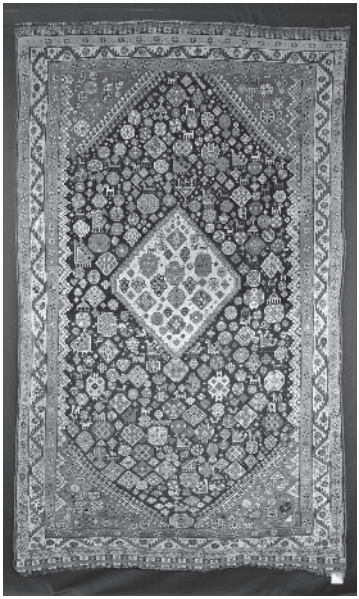

図２　絨毯，イラン（カシュカイ族），19世紀後半頃，田井みず所蔵

りして，残っているのは150点ほどである。

織りの種類は，パイル織（絨毯）が６割，平織り（キリム）が４割。地域別で言えば，トルコが35％，アフガニスタン（図１）[15]が26％，イラン（図２）が14％，コーカサスが11％，中央アジアが10％，その他となる。購入先はアメリカが多かったが，イギリス，オランダ，スイス，トルコ，カナダ，ブルガリア，オーストラリア，フランス，パキスタン，オーストリア，イスラエルなどであった。ドイツも大量のオリエント絨毯の蓄積がある国で，独自の eBay がある。ドイツ語ができるアメリカのコレクターは利用しているようだが，筆者には縁がなかった。

---

⑮　本稿に示した図１から図４のカラー版は，http://rug-lover.jugem.jp/?day=20200301において公開しているので参照されたい。（最終閲覧日　2020年３月29日）

都市工房の絨毯は，専門のデザイナーによるデザイン画が準備され，織り手は指示通りに絨毯を織るだけで，個人の創造性が入る余地はない。これに対してトライバルラグや村の絨毯は，使われる基本モチーフや大体のデザインが決まってはいても，空間の取り方やモチーフの配置，色の使い方など，織り手に任される部分がかなりあるので，一枚一枚の印象が違う。ひどく稚拙なものもあれば，そこそこの出来のもの，なかには美的センスと織り技術ともに優れたものがあり，「フォークアート」と呼ぶにふさわしい作品もある。最初はクセがなく小綺麗なものが好きだったが，やがてアンティークのトライバルラグや村の絨毯に魅力を感じるようになった。共通しているのは「味があり，織り手の人柄が感じられるもの」という点である。

50年以内のオールド絨毯は床に敷いて使っているが，100年を超える古い絨毯はこれ以上傷まないように，鑑賞用としている。壁に飾っているものもあるが，その他はときおり広げて眺め，いまは亡き無名の女性の作品から伝わってくるものを味わうのが楽しみである。絨毯は害虫と湿気に弱いので，年に数回は保管している物を日光に当てて風を通している。

6．海外コレクターとの交流
――国際絨毯会議（ICOC）2011への参加

海外からの絨毯購入の際に何人かとメールのやり取りをするなかで，欧米のラグ・ソサエティにはどんな人たちがいるのだろうかという興味が湧いた。その勢いで申し込んでしまったのが，2011年６月にスウェーデンのストックホルムで開かれた第12回「ICOC（The International Conference on Oriental Carpet 国際絨毯会議）」である。

ICOC は絨毯の研究者，コレクター，ディーラーが集う催しで，1976年以来，３，４年に一度，大陸間を移動しながら開催されてきた。参加の申し込みから，航空券やホテルの予約と支払いまで，すべてオンラインで行い，はじめての海外一人旅を経験した。会議の中心は「アカデミック・プ

ログラム」と呼ばれる絨毯関連のレクチャーで，「絵画の中の絨毯」「コレクターと蒐集品」といったテーマをはじめ，各研究者がペルシャ，トルコ，インド，スカンジナビア等の絨毯について，パワーポイントを使いながら解説する。正直なところ筆者は英語力が低すぎて，スクリーンの画像ばかり眺めていた。それでも，見知らぬ人が気軽に声をかけてくれたり，メールで知り合っていたコレクターと食事をしたり，ささやかな交流はできたと思う。

会場では特別展示の絨毯が鑑賞できたほか，「ディーラーズ・フェア」と呼ばれる展示販売会があった。トルコ人ディーラーが目ざとく名札を見つけて「コンニチハ」と日本語で話しかけてきたり，隆としたインド人ディーラーから名刺を渡され「お店をお持ちですか」と訊かれてドギマギしたり，ICOC は絨毯ビジネスの場でもあることを認識した。以前から憧れていたアメリカ人ディーラーのブースは強く印象に残っている。品物も好みにぴったりだったし，彼のボヘミアン的な雰囲気に直に接した筆者は，舞い上がるような気分だった。

このほか，ロイヤルパレスなどを回る見学ツアーにも参加し，国立歴史博物館では「マービー絨毯（推定1300-1420年）」などを見ることができたが，参加者はその色やテクスチャーを食い入るように見つめていた。ぎゅうぎゅうのバスの中で，異国の絨毯愛好家の体温を感じながら，ICOC に来て良かったと思った。

7．ブログの執筆がもたらす出会い

2010年11月から「My Favorite Rugs and Kilims」というブログをはじめた。最初は気に入っている絨毯やキリムの写真を誰かに見てもらいたいという単純な動機から始めたが，ブログを続けるなかで新しい出会いがあった。

ひとつは，趣味を同じくする人々との出会いである。日本には欧米のようなラグ・ソサエティが存在せず，愛好者同士の交流の機会があまりない

ため，こうした出会いは貴重である。まず，2013年にディーラーの榊龍昭氏とその知人が絨毯を見に来る機会に，インターネットで知り合った方も招いたところ，初対面でも，絨毯好きの共通点からすぐに打ち解けて楽しい時間を過ごすことができた。このつどいがまた次のつながりを生んでいく。2016年には「自慢の絨毯」を持ち寄る人もいて，各自の好みをシェアすることができた。2019年１月には後述の「絨毯展」で出会った愛好家たちを招き，３月の集まりには新メンバーが加わり，絨毯やキリムを広げて楽しんだ。

もう一つは展示する機会との出会いである。一回目は，榊氏が2012年に横浜で開催した「バローチ展」で，氏の絨毯に加えて筆者の絨毯も展示していただいた。ブログで紹介できるのは写真と文章だけだが，絨毯の魅力は実物でなければ伝わらない部分が大きい。欧米のラグ・ソサエティでは“show and tell”といって，絨毯を提示しながら話をするスタイルの活動があるが，筆者もこのとき初めてその真似事をした。話を準備する中で得たことも多かったし，質問にドキドキしながら答えたことも貴重な体験だった。

二回目は，2017年の千葉のギャラリーでの「絨毯展」である。自宅での絨毯のつどいがきっかけで展示会の運びとなった。重い絨毯を壁に設置する作業はギャラリーにとっても初めての経験だったため，筆者も一緒に準備をした。ホームセンターで資材を揃えたり，針仕事をしたり，説明パネルを作ったりする作業は，まるで文化祭の準備のようだった。効果を期待せずにブログで宣伝してみると，首都圏をはじめ三重や香川からも見学者があり，うれしい驚きだった。“show and tell”では，トライバルラグに馴染みのない方も興味がもてるように「遊牧民にとって毛織物は『家具』である」「名古屋の嫁入りとトライバルラグ」といったテーマにした。ブログを見て来られた絨毯商の方やコレクターもいた。小型顕微鏡を持参して絨毯の繊維を観察するコレクターからは，こういう楽しみ方もあることを教えていただいた。

こうして，ブログから始まった一つの出会いが次の出会いをもたらし，人の輪がリレーのようにつながっていった。決して規模は大きくないが，この間体験したことは，平凡な筆者の人生を豊かにしてくれたと思う。年齢や職業などに関わりなく，人と人とが「好きなこと」によってつながる可能性を秘めたブログの力にあらためて目を瞠っている。

8．「絨毯そのもの」と「絨毯のむこう側」を考える楽しさ

ブログを書くことで得たもうひとつの収穫は，絨毯について深く考えるようになったことである。それまでも，絨毯を集めるうちに「遊牧民は実際にどんな暮らしをしているのか」「天然染料と合成染料ではどう違うのか」「絨毯の硬さが違うのはなぜか」「トルクメン絨毯はなぜブハラ絨毯と呼ばれるのか」など，知りたい事柄が次々に現れたが，もしブログを書いていなければ，敢えて調べることもなく，そのままで終わっていたと思う。ところが「次はブログに何を書こうか」と考えているうちに，自分が知りたいことを可能な範囲で調べて，分かったことを記事にするようになっていった。日本の資料には限りがあるので，写真を眺めるだけで終わっていた英文資料も含めて，辞書を引きながら読みはじめた。お気に入りの絨毯が増え，それらに囲まれて生活するだけでも十分に楽しいが，絨毯そのものについて，また絨毯の背景にある歴史や文化を知りはじめると，楽しさは二倍三倍になっていく。

手織絨毯の制作に際しては，まず羊を洗い，剪毛し，用途によって毛を選別し，繊維の方向を揃えるために金属のクシで梳き，簡易な道具で糸を紡ぐ。そして一目一目ノットを結んで織っていく。1856年のウィリアム・パーキンによるモーヴの発見以来，合成染料が大量生産されるようになって絨毯にも使われたが，近年はトルコの「DOBAG（天然染め研究開発）プロジェクト」[16]やイランの「ミーリー工房」[17]など，天然染料にこだわる

---

⑯ このプロジェクトについては June Anderson, *Return to Tradition: The Revitalization of Turkish Village Carpet*, University of Washington Press,

試みもなされている。手紡ぎ糸にせよ，天然染料にせよ，古いものをたくさん見ているうちに違いがわかってくるように思う。本ですこしずつ知識を得ながら，手持ちの絨毯と向き合っていると，徐々に自分なりの価値判断ができてくる。好みもあるので絶対的な基準はないにしても，「自分の目を育てる」のは楽しいことだと思う。

織り技術に関しては，マーラ・マレット『織りの構造』[18]やピーター・ストーン『オリエント絨毯の修復』[19]などを参考にし，やはり手持ちの絨毯と引き比べながら理解を進めた。また，自分で実際に織ってみると，より理解が深まる。「美しい世界の手仕事プロジェクト」で知り合ったＴ氏の指導のもとでコースターサイズの絨毯を織ったが，毛糸の特質，緯糸の詰め方，端の処理の仕方など，初めてわかったことが多い。絨毯の構造が分かると，どんなタイプかを判別できる手がかりとなる。古い絨毯はどこでどんなグループが織ったのか，分からないものが多い。手持ちの絨毯にも由来不明のものがあり，羊毛の質や染色や織りの構造などを頼りに，推理を楽しんでいる。ちなみに“TurkoTek”というサイトでは，愛好家たちが絨毯に関する様々な疑問をテーマに議論をしている[20]。たいていは結論の決め手となるものがなく，仮に結論が出たとしてもどうということはないのだが，考えること自体を楽しんでいるようだ。

「絨毯そのもの」ばかりでなく，「絨毯のむこう側」について考えることも楽しい。筆者は最初「遊牧民」が実際にどんな暮らしをしているのか全く知らず，絨毯に出会ってからも，遊牧は「自給自足に近い自由な暮ら

Seattle, 1998を参照。

⑰　ミーリー工房の試みについては，福井泰民ほか『華麗なるペルシャ絨毯の世界』（渋谷区立松濤美術館，2004）を参照。

⑱　Marla Mallett, *Woven Structures: A Guide to Oriental Rug and Textile Analysis*, Christopher Publications, Atlanta, 1998.

⑲　Peter F. Stone, *Oriental Rug Repair: Step-by-Step Reknotting and Reconstruction, Care and Preservation*, Thames & Hudson, London, 1981.

⑳　http://www.turkotek.com（最終閲覧日　2020年３月13日）

し」という勝手なイメージを持っていた。しかし書物によって「絨毯のむこう側」を知り始めると，遊牧民の実際の暮らし，西アジアや中央アジアの歴史や文化，さらには19世紀末の欧米社会と絨毯との関係など，それまで知らなかった新しい世界が見えてきた。

たとえば，松原正毅による『遊牧の世界』[21]では，放牧の技術や畜群の管理，経済活動や社会関係などについて丹念なフィールドワークがなされて，放牧地の移動，ヤギや羊の剪毛やテント作り，乳製品づくりと販売などが具体的によく分かり，遊牧が高度な経営力や社会性が必要とされる生業であることにも認識を新たにした。また，ハラルド・ベーマーの『アナトリアの遊牧民』[22]では，トルコ遊牧民の各グループについて多方面からの考察がなされているが，絨毯愛好家が見逃せないのはキリムや袋物の使われ方である。「チュワル」と呼ばれる収納袋は，嫁入り道具として織られた装飾性の高いものだけでなく，飾りなしのものもあり，テント背面に一列に並べられて「壁」の役割も果たす。二枚接ぎの大判のキリムは，日本人の発想だと「敷物」と考えがちだが，実際には，移動の際にラクダの背に積んだ荷物を押える役割を果たしたり，テントの内側側面に張り巡らして，防寒と装飾の役割を果たしたりすることを知った。

そのため，本来このような使われ方をする大判のキリムが，19世紀末にパリのデパートで販売され，「カーテン」として使われたことを知ったときには驚いた。トルコキリムをカーテンとして使用していたのは，スウェーデンの Hallwyl 伯爵夫人（1844-1930）である。夫人は毎年のようにヨーロッパや北アフリカを旅行し，その旅先で相当数のオリエント絨毯やテキスタイルを購入した。カーテンに使われたトルコのキリムは，1886-87年にかけてパリの「オー・ボン・マルシェ」で購入されている[23]。

---

(21) 松原正毅『遊牧の世界―トルコ系ユルックの民族誌から』中公新書，1983.

(22) Harald Böhmer, *Nomads in Anatolia: Encounters with a Vanishing Culture*, Ganderkesee, Germany, 2008.

(23) Eva Helena Cassel-Pihl, *The Hallwyl Collection of Oriental Carpets and Textiles*, Hallwylska Museet, Stockholm, 2003, pp. 22-23.

夫人が生きたのは，ロンドン，パリなどで万国博覧会が開かれ，鉄道網の整備やスエズ運河開通を背景にトーマス・クックが海外旅行を定着させた時代であった。また世界最初のデパートであるオー・ボン・マルシェは，天才経営者の手腕によって「デパートにひとたび足を踏みいれた買い物客は，必要によって買うのではなく，その場で初めて必要を見いだすことになった」[24]という，大量消費社会へのパラダイムシフトを促した存在である。

夫人は議論の多い「レイハンル」と呼ばれるキリムも持っていた。レイハンルはシリア国境近くの町であるが，『アナトリアの遊牧民』によれば，その名は「レイハンル族」という遊牧民グループに由来し，トルコ北部のシワスまで長距離の移動を繰り返していたという。永田雄三の論文「アレッポ市場圏の構造と機能」[25]によれば，「アレッポ・トルクメン」と呼ばれる遊牧民グループはラクダを使って大量の物資を運び，戦役や商業活動の輸送に不可欠な役割を果たしていたという。18-19世紀のアレッポは，英，仏，蘭，伊などの領事館があり，非ムスリムのアルメニア人，ユダヤ人，ギリシア人商人も活躍する，オスマン帝国最大の国際貿易センターであった。レイハンルの町はアレッポに近く，アレッポ・トルクメンとの関係はあるのか，また一部のレイハンル族が定住化を強制されなかったこと[26]など大変興味深いが，さまざまな点が不明のままで，レイハンルとよばれるキリムの起源についての結論は出なかった。しかし19世紀末に遊牧民と西欧社会が思わぬところでリンクしていたことに驚き，自分なりにあれこれ調べる作業は，それだけで楽しかった。

---

(24)　鹿島茂『デパートを発明した夫婦』講談社現代文庫，1991，p. 228.

(25)　永田雄三「アレッポ市場圏の構造と機能」，佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』山川出版社，1991，pp. 127-162.

(26)　岩本佳子『帝国と遊牧民―近世オスマン朝の視座より』(京都大学学術出版会，2019)，p. 254によれば，ウスキュダルの旧母后のモスクのワクフに属するレイハンル族は，ワクフに属するがゆえに，ラッカへの定住を強制されず，遊牧生活を続けていたという。

図３　キリム，トルコ，19世紀末頃，田井みず所蔵

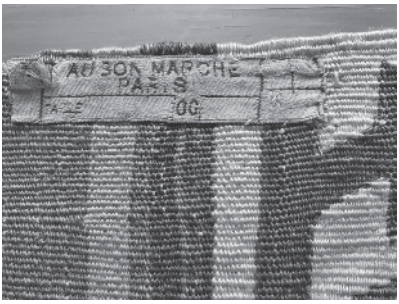

図４　図３のキリムに縫い付けられている「オー・ボン・マルシェ・パリ」のタグ

この話には後日談がある。「そういえば，うちにもフランス語のタグが付いたキリムがあった」と思い出して確認してみると，アメリカ人コレクターから譲り受けたキリム（図３）には「オー・ボン・マルシェ・パリ」というタグ（図４）が縫いつけられ，上部にはカーテンの芯地が取り付けられていたのである。トルコ中央部で織られたと思われるキリムは，パリのデパートを経てアメリカ大陸に渡り，極東の島国にたどり着いたのだ。世界のあちこちを旅してきたキリムは，筆者よりも経験豊富なのかもしれない。

平凡な一市民でも絨毯蒐集をきっかけにして，新しい人々，新しい世界との出会いがあった。絨毯は背景に大きな世界を持っている。想像のなかで「空飛ぶ絨毯」に乗って，これからもその世界を旅してゆきたい。

おわりに

以上が，絨毯コレクション形成の経緯，またそこから派生したさまざまな出会いと学びについて，田井みず氏自らが記したところである。インターネットを駆使して，日本に居ながらにして絨毯を蒐集し，それについてブログを書くことで実際にコミュニティーが生じ，展覧会を開催したり，海外にまで出かける様子が生き生きと綴られている。さらに，歴史や文化，染織などといった関連する分野について学び，知識を深め，考察することを楽しむ様子が描かれている。田井氏は，インターネット時代が生んだ新しいタイプのコレクターである。

田井氏も活用するインターネット・オークションだが，これを世界で初めて開催したのは，古美術商の奥延哲也氏で1995年のこととされる[27]。その後，1999年にはビッダーズ（DeNA），ヤフオク，楽天フリーマーケット・オークションが開始され，2000年にはeBayジャパンが参入した[28]。つまり，田井氏が絨毯を集めはじめた2005年には，いくつもインターネット・オークションが利用可能になっており，それをうまく活用することで短期間にコレクションを形成している。

またブログを持つことで人の輪が広がり，展覧会も開催しているが，これもインターネット時代における，コレクションを通じたコミュニティー作りの実例として興味深い。1932年に設立されたニューヨークの「ハジババ・クラブ」に代表されるように，欧米には自らの絨毯コレクションを見せ合い，その絨毯を生んだ社会や文化について語り合う組織がいくつもある[29]。日本にはなかった絨毯コミュニティーが田井氏のまわりに創出され

---

(27) 佐保圭「古美術商の意地が作った世界初のネット・オークション」『日経ネットビジネス』49（1999），pp. 110-113.

(28) 井上理「eBayの上陸で競争が激化―ネット競売の利用が広がる」『日経コンピュータ』492（2000），pp. 38-40.

(29) ハジババ・クラブについてはDaniel Walker, *Oriental Rugs of the Hajji Babas*, Abrams, New York, 1982, pp. 13-26を参照。

ていることは，コレクション形成が個人的な行為でありながら，広く社会に開かれたものでもあることを示している。

さらに，絨毯を集めることが，幅広い分野への興味の入り口となって，遊牧民の文化や，絨毯の流通などさまざまなことに関心を持ち，知識を深めているが，これは生涯学習の観点からも重要である。田井氏の実例は，集めたモノが尽きることのない知的関心の源泉となり，何かを学ぶことを促し，日々を生き生きと過ごす一助となることを示している。

インターネットによって美術コレクションの形成が誰にでも開かれたことで，誰もがモノを集め，それによって人とつながり，尽きることのない学びを味わうことができるようになった。すなわち，インターネットの発達によって美術コレクションは，美術品を鑑賞して楽しむ，あるいは美術館を建てて社会に還元するという従来の目的のみならず，社会とつながりを持ちながら，主体的に何かを学び続ける喜びをコレクター自身に与えることにも寄与するようになったのである。人生100年時代の過ごし方が議論される今，誰もが気軽に参入できるインターネット時代の美術コレクション形成は，大きな可能性と意義を持っているように思われる。

［追記］
図１～図４について，カラーのものを下記 QR コードに示した。適宜参照されたい。